

ばつくとうざばすと その四八

中世村落と石積

現在は城ブームということもあり、石積というと城郭の石垣が連想されるかもしれない。ここで取り上げるのは、傾斜地において屋敷や耕地などの平坦面を造成したり、強風や波浪から家屋を守るために積みあげられた村落での石積である。一部の棚田・段畑などでは、景観の美しさから被写体として注目されているが、村落の石積の多くは関心が持たれないまま、コンクリートなどに取って代わられ、消滅しつつある。民衆が伝えてきた技術であるため、城郭石垣などとは異なり、文書や記録に記されることも少ないのである。

史料館に保管されている菅浦文書や菅浦家文書のなかに、ごく一部ではあるが、中世の民衆が築いた石積が現れる。琵琶湖最北部の葛籠尾崎^{つづらおざき}では、険しい山地がそのまま湖に達しており、平地は狭小な谷のみである。その先端近くに位置する菅浦では、湖に面する狭い傾斜地に集落を構えざるをえなかったため、中世後期の屋敷地は、「上ハ花藏坊ノ上ノ石カキヲ限」、「下ハいしかきを限」（菅浦家文書九六・一三一）などと表記され、造成にあたって、石積が用いられていた。また田

地や畠地でも、「下ハ石カキヲ限」（菅浦家文書七九・八八）などのように、平坦面を確保するために石が積まれたのである。なお「限東南石蔵」「北ハ石倉を限」（菅浦文書三五二・八〇〇）のように、「石蔵」「石倉」の記述もみられるが、これが畦畔の石積なのか、何らかの施設なのかは、はっきりしない。

棚田の畦畔には、土坡と石積の二タイプがある。滋賀県で典型的な石積棚田は高島市の畑や鵜川^{うかわ}などにみられ、鎌倉・南北朝期まで遡る可能性が高いが、どちらも比良山系北部の花崗岩地帯に立地している。耕地化を進めるにあたっては、土中岩石の除去・処理が必要であるが、それを転用した石積畦畔による平坦面の造成が、開発と同時並行したと考えてよい。自然石を利用した棚田の石積は、城郭石垣などの技術を前提とする必要はなく、地域ごとに継承されてきた農業技術の一部である。葛籠尾崎においても、砂岩やチャートが広く分布しており、開発を進めるにあたっては、岩石を除去しながら、耕地を確保せねばならなかったのである。中世以来の棚田が展開していたはずの菅浦の日差^{ひさし}・諸河^{もろかわ}では、一九八〇年代前半に圃場整備が行われており、今ではその姿を確認することはできない。

現在の琵琶湖は南郷洗堰^{なんとうあらいだめ}で水位がコントロールされている

が、かつては季節的に大きく変動していた。また中世から近世にかけては降水量も増加し、長期的にも水位は上昇している。そのため湖西では、平安後期～南北朝期の基幹津湊であった木津の内湖が水没して、今津の内湖にその機能が移る。湖北の塩津でも、平安後期に湖岸に造成された津は、南北朝期に水没して、川の上流部へ移動する。自然地形を利用して、津湊が立地していたからである。菅浦の場合、急激に水深が深くなる地形のため、水没する面積は少ないものの、集落への影響は大きく、一五世紀以降は気温低下にもなつて季節風も強まっている。現在浜側には、近世中期以降のものと推定される一〇・五メートルほどの石積が造成されている。なお湖西の海津では、長さ一・二キロ、高さ二・五メートルの近世中期以降の大規模な石積が残る。文献から天和二年（一六八二）には「波除石垣」が築かれており、加工技術などから、一六世紀末から一七世紀と推定される石積も確認できる。同じく今津でも、一七世紀末には湖岸一帯に長大な石積が構築されていた。海津や今津の石積は、何度も領主の費用援助による改修を受けているが、菅浦では村落による造成と推定され、やはり積み直しがなされている。湖岸の利用形態から、何らかの先行する施設が村人達の手で作られていたことが推測



【菅浦の「波除石垣」】

されるが、それは戦国期まで遡ると考えられるのである。

（史料館客員研究員 水野章二）